
かもめとちどり

司

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

かもめとちどり

【Nコード】

N1545C

【作者名】

司

【あらすじ】

夏休みの宿題・鳥類観察記録。それを先に終わらせようと千鳥は近辺の公園にバードウォッチングをしに向かったが…？ほのぼの系コメディ短編。

(前書き)

ほのぼのとしすぎて目的があまりなく、かなり普通な小説ですので、暇つぶしとして読んで頂いた方が最善かと思えます。

かもめとちどり

「もう明日は夏休みです。が、ここで宿題を追加しようと思っ
ます」

もちろん

「ええーっ!?」なる音声が教室中に響きわたる。だが、他の生徒
が驚いていても、一人の男子生徒、千鳥は驚かない。

特に千鳥はクールな生徒ではないが、驚かない理由は存在した。
「いつでもいいので夏休みの間、近くの公園などでバードウォッチ
ングをして、観察記録を作ってきてください。一日だけでも充分で
す」

ため息が漏れる。あまりにも予想通りだったので、むしろ呆れる
理由も存在している様だった。

このクラスの担任は異常と言っていい程に、鳥好き。暗く言えば
鳥オタクである。だから、こんな宿題を提案したのだろう。それ以
前に相当な量の宿題があるというのに。

ただめんどくさいだけで、そんなに難しいことではない。簡単に
そう思った。

そして翌日になってみれば、千鳥は双眼鏡と大学ノートとその他
一式を持って、公園に向かう。

たしかにめんどくさいが、別にめんどくさがりではない。千鳥は
そういう事を早めに終わらせるタイプなのだ。

それにしても暑い。皮膚から汗がだくだくと流れ出てくる。夏と
は、絶対に涼しくならない季節なのだろうか。なんらかの手違いで
雪でも降ってくれないものか。なんて思っていると、公園に着いてい
た。

ここは意外と広い。噴水がある程に広い。と曖昧に言えば、理解
できるのか? いや、実際に噴水はあるが。とにかく広い。

広くても、千鳥の汗はばたばたと落ちるだけだった。違うか。広いからこそ落ちるだけなのか。

三十分間ほど大きな木を見て回ったが、何もいやしない。鳥の鳴き声なんて聴こえない。聴こえる音は、風で木々がざわざわと揺れる音だけ。

そりゃあそうだ。こんなに暑い世の中なんだから、鳥でも巢に籠もりたくなる。

「……………」
瞬時に思った。鳥に同情してどうするんだ、と。
帰ろうとした時、奇妙な声が聴こえた。

「……………」
段々とその声が明らかになってくる。

「……………」
女性の声。声と言うか、これは言葉か。
「わったしはあく、こーどねーむ、か・も・めえ〜」

奇妙な歌らしい歌を歌う少女が公園内に入ってくる。あれは、見覚えがあるけど、…………誰だったか。

そういえば、手には自分のと同じ種類の大学ノートを持っている。もしかしたら…………と考えていると、その少女と視線が合ってしまった。

「…………あれー？」
少女は、トコトコと小さな足取りで、千鳥に近づいた。

「…チドリ、くん？」
少女は首を傾げて、千鳥に問いかける。

確定した。この少女は同じクラスの女子だ。…こんなに小さいのに。身体的にも、精神的にも。

「…いかに、千鳥」
「わあっ！チドリくんもトリさんを観察しに来てたんだー！」

随分と色々なところが幼く、ぼわぼわとした気力を発している少

女は、うみのかもめ海野鷗

彼女もやはり、千鳥と同じ目的だった。が、それはあくまでも過去形になり得る。

「お前さ、ノートだけ持ってきて何をしに来たんだ？木陰で扇いで休むだけか？」

「え？ノートだけ？」

両手に持つ大学ノートを見つめながら

「うーん？」とか唸っている。いまいち意味がわかっていないらしい。呆れてため息さえ出してしまう。

「あ！これ数学のノートだった！」

真性の馬鹿って本当にいるんだな。しみじみとそう感じた。

という訳で…いや…何が

「という訳で」なのか。と言いたいのには正しくも自分なのだが、状況を整理する。

結局、千鳥が説明して、やっと理解した鷗であった。

「そうだよ、エンピツとか双眼鏡とか持ってこないと意味ないよね」。あはははは

朗らかに笑う鷗。笑う場か？

「じゃっ、いい機会だね。一緒に観察しよー？」

「はあ？」

「わたしがチドリくんの、エンピツとノートの紙を借りて、観察するの。二人の方が楽しいでしょ？」

そう言っつて、鷗は千鳥に、ずいっと手を差し出してくる。やっぱり理解してないみたいだ。

「…いや、何かが根本的におかしいと感じる」

いつまで経っても千鳥が貸さないの、鷗はやや強引に、千鳥が持ってた筆記用具を奪い取り、大学ノートの白紙も三枚ほど破り取った。

「よし。完了ー！」

…そして、千鳥を置いて楽しそうにスキップする鷗であった。

「あー、そうだそうだ。チドリくん、わたしのことは、かもめって呼んでね」

「…はあ」

なぜか

「はい」にならないで

「はあ」とため息混じりの返事になる。もう疲れが実ってきたんだろつ。

「こーどねーむ、かもめだからね」

「…コードネームの意味わかってるのか？しかも、かもめってそのまんまだし…」

しまった。あまりの馬鹿馬鹿しさに呆れてツッコんでしまった。

当然の如く、鷗は急に険しい顔になった。

「むうー……わ、わかってるよ、それくらい………」

唇を尖らせて、少し潤んだ瞳で千鳥を見る。一瞬だけネズミとかリスとかの小動物に見えた。

「とつ、とりあえず！ほら、かもめって呼んでみてよ！」

「…かもめ」

「…なんかつまらないなあ……かもめちゃんって呼んでみて」

「…かもめちゃん」

「…迫力っていうか……うーん……かもめ殿って呼んでみて」

「…かもめ殿」

「…かもめさまって」

「…かもめ様」

「…かもりんって」

「…かもりん」

「…かもめ軍曹」

「却下。かもめでいいだろ……」

「ええー、だつてえ……」
そうして結局かもめに決定した。凄く無駄な時間を過ごしたと思
う。

「……ね、まだあー？」

「……まだ」

既に二十分は経過している。

今の今までずっと、鷗に命令されて、双眼鏡で周りの木の茂を見
ていた。でも、鳥は一向に見つからない。脱水症状になりそうなく
らいに汗が流れている。実際、もう死にそうだ。

「……かもめ、休憩しないか？」

んーと少しの間考えていたが、返事はそう遅くはなかった。

「そうだね。休憩しよっか！」

そして千鳥はベンチに座り、鷗はお金を持ってきてきたらしくて
「飲み物買ってくるね！」と言い、元気に走り去っていった。

暑いけど、妙に平和だと感じる。鷗がないせいなのか。

そういえばあいつ、あんな奴だったっけ？頭の中で昔の情景を再
生する。

入学してきた頃から、いや、あの幼さは生まれてきた頃からだろ
うな。ともかく明るい奴だった、あんなに話したことないけど。

…… たぶん、それだけ。特にあいつが気になったりはしなかつ
たし、そもそも、あんなに接点がなかった訳だし。

「やつほー。買ってきたよー！」

そんなことを考えてたら、鷗が戻ってきた。手には二つの飲み物
が入ったビニール袋。

「ああ、サンキュ。金は、次会った時に必ず返す」

「いいよ、これくらい」

いや、ちゃんと返すよ。千鳥がそう返事をする前に、鷗は袋の中の缶を取り出して、それを千鳥に渡した。

「はい、どーぞー！」

…まあいいか。と心の中で思いながら、缶を受け取った。

予想してたのは冷感だと誰もが思うはず。でも違った、手のひらに感じるのは温感だった。

「んあっ!?!」

何事かと思つて受け取った缶を見てみると、

「…なんだこれは」

「チドリくんは見た目的に、コーヒーが好きなのかなって思つて。

…もしかして嫌いだった?」

別に嫌いではない。が、この暑さの中では麦茶の方が飲みたかつたと言いたい。まあ、どっちにしる我慢できる。けど問題はそこじゃない。

「…むしろ、今は温かい飲み物自体が嫌いだ…」

…なぜにHOTを選んできたのかと。季節感という意識が足りない…無いのか?

「んく…んく…っはあ、回復した!やっぱり夏は冷えた飲み物だよねー!」

呆ける千鳥を無視して、鷗はノンキにスポーツ飲料を飲んでいた。言ってる事とやってる事が矛盾してますよ、そこのお馬鹿さん。とは言わなかった。馬鹿に言つても無駄か。と考え直したから。

好意で買ってきてくれたのだから、飲まない訳にもいかず、少し冷ましてから一気飲みした。そしてゴミ箱に放り込む。…非常に体が火照ってしまった為、汗の量が二倍くらいになってしまった。そのうち塩臭くなるな。

「さーて、休憩終了!再開しようか」

「……………」

ただ普通に、千鳥は頷く。…なんだか、自分が何をしに来てるのか、どんだんわからなくなってきた。

…と歩き回るものの、鳥なんて全然いない。

千鳥はほぼ諦めかけていた。暑いし。

「かもめ、代わってくれないか？暑くて暑くてもう……」

振り向いても、後ろにいたはずの鴉はいなかった。

どこにいるんだと辺りを見回してみたら、簡単に見つかった。…

ブランコで遊んでいる…。

「きゃっほーう！きーもちーいなあー！」

「……………」

もういい加減疲れたので、千鳥もブランコに座ることにした。

そしていつの間にもやら太陽が落ちる時刻になっていた。

「楽しかった！ね、チドリくん？」

「……………そうですね」

本当に何をしに来たのかと。…遊びに来ました。

千鳥はずっとそんな自問自答を繰り返していた。嬉しそうに笑顔を作る少女の隣で。

鬱になりながらも、また翌朝になれば、千鳥は外に出かける。

今度は、少し遠めの公園へ。持ち物は昨日と同じ。

やはり今日も暑い。というか昨日より暑い。

まあ鴉はいないだろうから、安心して観察できる。…鳥さえいれば、の話だが。

公園に着いた途端、家に帰りたくなった。

「かもめーはきょーうもーゆーくのーですー」

「……………なんでだよ」

いや、もう帰ろう。うん。そう思って公園を出ようとした直後

「あつ、チドリくん！」
いつそ引きこもって他の宿題でもするか。と考えた。

そして何日も何日も何日も色んな公園にバードウォッチングをしに行けば、あいつが必ずいた。

「わたしたち、何かの糸で結ばれてるのかなー？えへへへ…」
思い当たる節は『鳥』だろう、たぶん。
担任を恨む、呪う、絶対に。

おまけ

「これは、ひよっとして、らぶこめでいーな展開かー！？チドリくん、そこら辺はどうなんだいっ！！？」

「……ラブコメ云々以前に、この物語は終了してるぞ」

「……うん？終了って？」

「……文字通り」

「は、初めて知ったよ、そんなの」

「……かける言葉も見つからん」

「……終了したのに、おまけとか必要あるのー…？」

「……すねるなって。…おまけがあるのは、あまりにも普通に終了してしまったから、物足りなさを感じる読者が多いはず。つまり「読者のみなさんが楽しめるように。って理由で作ったんだね」

「一応はそういうことだ」

「会話文だけで進んでるけど…？」

「それは、今は気にしなくてもいい」

「そう？」

「そう」
「で、何をするの？」
「…そうだな、まずは【鳥居学が担任じゃなかったら】か」
「え、え？どういうこと？とりまなぶって誰？」
「前者は見てればわかる。後者は前言撤回した方がいい」
「？」

【シーン1】

明日は遂に夏休み。
宿題は大量にあるが、それでも、純粹に楽しみだ。
夏祭り、海水浴、e t c…。イベントだって沢山ある。
…もしかしたら、彼女とかできるかもしれない。
そんな期待を胸に納めて、
「ばんざい、夏休み。ってか」
千鳥は心を躍らせながら、眠りについた。

「…これだけなのー？」
「…鳥居がいなくなることで、物語が一気に地味になるからな。
かもめと会える確率も少なくなる訳だ」
「とりーって、せんせーのことだったんだ」
「そう」
「せんせーがキーキャラクターだったんだね…」
「…認めたくないものだな…鳥居学の…鳥オタク故に生み出せる鍵
というものを…」
「…？どーゆーこと？」
「…いや、なんでもない。さて次は【海野鷗生活記録】」
「わわっ！なにこれえ！？恥ずかしいよー！」

「安心しろ、破廉恥な記録ではないから」

【シーン2】

それは平日の出来事。

鷗はうにゆうにゆうと口を動かしながら、目を擦り、起きる。

「……あふう……」

起きたらまず、時計を見る。

「……」

だが、寝ぼけている為、時計の短い針が8を指してようと、寝てしまう。

「……んにやすみ……」

こうしていつも通りに、学校に遅れる訳だ。

「……また遅刻ですか……」

「……ご、ごめんなさい……」

周りから笑い声が漏れる。

鷗の顔は、みるみると朱色に染まっていく。

「……恥ずかしいなあ……」

誰にも聴こえない様な声で、そう呟いた。

「……くー……くー……」

もはや授業中に寝るのは日常茶飯事。

「……」

そして、教師のこめかみの青筋がびくびくと動いているのにも気づかずに、教科書のカドで叩かれる運命に逢う。がつん、と。

「うがぁう!?!」

すっごい奇怪な声で跳ね起きれば、やっぱり周りは大笑いしていた。

放課後は、ふらふらと寄り道をしながら帰宅する。

商店街に入って、ぬいぐるみなどが売っている老舗を見るのが鷗のマイブーム。というか、中のぬいぐるみを見て回るのが本業。

「か…かわいい…」

買いはしない。見るだけで満足。それに学生だし学校帰りだからとの理由もある。

鷗は意外にも夜更かしタイプである。特にやることも無いのだけど、なんとなく起きているという。

「…ん…」

でも最近になって考えごとをする様になった。

火星人は本当にいるのか、とか、火星人はタコみみたいな形をしているのか、とか、火星人がいるなら月星人やら水星人やら木星人やらがいるのではないか、とか。

「うーん…やっぱりわかんないな…」

それで結論にたどり着かないまままで終わるのだ。

「ふああ…もう寝よ…」

これにて海野鷗の一日は終了する。

「…実際にくだらない」

「…う…も、もういいよ。おまけなんて、おまけなんて」

「…わかった、ごめん」

「…ぐす」

「それにしても、かもめも怒られてたのか」

「かもめも？」

「ああ、鳥居とその他教師にだ」

「…つてことは？」

「…怒られる生徒、その中の一人が千鳥だったりするのである」

「へー、そうだったんだ。チドリくんは優秀なんだと思ってたけど」
「…嫌味か？」

「違うよ。ほんとに思ってたよ」

「…そうか。…じゃ、次で最後」

「もう最後なんだね」

「そんなに長引かせる訳にもいかないからな。…タイトルは【? ? ?】
?】…?なんだこりゃ」

「チドリくんも知らないの？」

「予定外だ。とりあえず、見てみるか」

【シーン3】

そこは夜の公園。いるのは、千鳥と鴉だけ。

ベンチに座る二人は、月に照らされ実に秀麗な姿だった。

千鳥は鴉を見つめ、鴉は千鳥を見つめる。つまり、二人は互いを見つめ合っている。

「かもめ」

「チドリくん」

背景は闇の中で輝く月の光。

唇と唇を重ね、また何度も何度も重ね合う。そのうち呼吸音が激しくなり、時が経つと、二人の唇は離れないでいた。

互いの舌が絡み合い、唾液が外に溢れるが、二人はそんなことも気にせず、卑猥な水音を立て続

「わ……………え…えっちなだね…これ…ま、まだ続きあるよ」

「待て待て待て待て待て待て待て。やめろ、お子さまは見るんじゃない」

「…見ないの？」

「…見たいのか」
「そ、そういう訳じゃないよ！」
「……まったく違うジャンルになるから、終わりだ」
「もうちよつとだけ……見たかったなあ……」
「………という訳で、おまけ終了、と」
「……やっぱり、足りないんじゃないかな」
「……できる限りの事はやった」
「そうかなあ……」
「……そうだ」
「じゃあ……みなさん！いつかまた……どこかでお会いしましょー！」
「……古いと思った」
「うっ………」
「とりあえず……ここまで読んで下さって、本当にありがとうござい
ました」
「……ございましてー！」
「では、さようなら」
「さよーならー！」

了

(後書き)

小説なのにおまけなんて入れて大丈夫なのだろうか…と心配してま
すが、それでも楽しんで頂けたら光栄です。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1545c/>

かもめとちどり

2009年3月24日09時21分発行